

資料 山之口獏：新資料および初出本文紹介

松下，博文
九州大学大学院博士課程

<https://doi.org/10.15017/10417>

出版情報：文献探究. 21, pp.58-66, 1988-03-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



た。係りが異なるので直接太宰の身のまわりを世話することはできなかつたが、帰省などで金木の生家に滞在している間は内緒で太宰のためにいろいろと便宜を図つてやり、そのことをとても嬉しく思つたものだといふ。／＼同じ頃津島家の鶏舎係として住みこんでいた外崎勇三の話によると、太宰がトキ女に好意を抱いていたことは周囲でもうすうす勘づいていたようである。(略)外崎の記憶では、当時のトキ女は丸顔で目の大きな可愛らしい娘であつたといふ。行儀見習として住みこんでいたので、他の使用人と違つて服装も小ざつぱりとしていて津島家の家族からも可愛がられていた。それだけに女中仲間でもちよつと目だつ存在で、大事な来客の時など、よく接待役をさせられた」(相馬正一『若き日の太宰治』前出)。

——九州大学教養部助教授——

前考補遺 山え口鏡「沖繩島」

松下 博文

前考で紹介した山え口鏡の「沖繩島」についてその後「琉球の幽霊」(『農林春秋』昭26・12)という次のような文章が目についたのでここに引用し、あわせて「沖繩島」のよけについても若干の補足を加えておきたい。

琉球には、至るところに、がような種類のイメージ(幽霊)に関する様々なイメージ——(松下註)が深まって、なんとなく、宗教性というような感じの豊かなところなのであつたが、戦争は、琉球の持つていたあらゆるものを台無しにしてしまつて、まづは、お寺のほとつさえもないことである。お寺もなく、人間や文化や風俗などに限らず、琉球は、爆弾や砲弾によつて、うろたへた、世界まで徹底的に失つてしまつたからに違ひないのだ。

この文章と鏡が最も主張したのは、戦争によつて琉球の宗教的側面さえも徹底的に破壊されてしまつたといふことにある。うまごもなく沖繩には血縁的共同体を核とした信仰があるし、死霊やマブイなどの霊的存在を信じるアニミズムの型態も存在する。「沖繩島」の八宗教なんものが影をひそめてゐる。Vとかへお寺なんかもなくなつた。Vという表現はこれに宗教的側面をひくくするのだ。「精神的風土」としての「沖繩」がそのまじとに破壊されてしまつた。何かとかがえしのつがな、大切なものを失つてしまつた。といふことへのやるせない思いが込められて、いふように思われる。人間が強烈なダメージをうけるのは物質的な喪失よりも精神的なそれのほうがはるかに強いといえるのだが、沖繩を離れ遠く異郷にゐる鏡にとつてはわれわれが想像するよりもはるかにそのダメージは大きかつたにちがいない。「沖繩島」はがような失なわれた「精神的風土」としての「沖繩」への悲しみ、悲しみを押し殺した形で表出されている作品としてとよめると思ふのである。